

教 仇

繪本四季物語

後編

二

913.5

工

後物 2

報仇四季物語後編卷之二

遠州日阪住於浪花耶人亭

栗杖亭鬼卯著

東武慶上遊浪速客舎之日

山東京山校

第十三齣

老狐盤井の危難を救

おも佐保川市糸の心移つよあま成社素一たまひま

二見致然波迎大神文坂のころねく狂巻あつ。鴉鴉石

小て盤井小争曲は屋とたまひ二曲終るは日月も西に

かふふきけをば盤井坂守たまひ街にまきしといへども

美留小もねりなば具かえつて不具まやううなんと

供と觸ま。盤井路里富里佐とも。内宮の市所
方へかつたまひ。聖日金沢へのそつたまへを市所
さましく送るりの奴さし。新奈をてふ所まで見
送るやれればまより何漕が浦越がうら。白子の親
音小系論し。不乃極成まがたまひ。日市をの名
小より時雨吟とも。此土産は酒の。素名よりふねを
勢田のやしろへまよてむひかの在中おのころく未
ぬる旅成かりひし。右身成志たひハッ指寺より岡
邊小ありたまへども盤井路里富里まといふ。と

如所もけあさりみあらね。吉田の歌二階うら
まよく。麻の子のふ王能もけく小たま。み成
葉ハまし。いおうし。くれまより。白髪の里。淡名
の指ハ名のそして。船よて。香坂へ後り。昔うら
布成りけ川の里。成はなま。伊達方村。茶
小ありたまふ。小いと。奇。藤なる。草菴あり。屋の
築山林泉の。指。極。うら。人の。住。あならんと。
佐保川の。あ。ま。ま。茶。成。を。た。ま。へ。五。斗。
の。いと。ま。し。と。小。壺。茶。成。さ。し。出。と。さ。ま。扱。と。

四季抄記 卷二

よ教書教多様なまば佐保川市前も
帰くけ家小へ陸人の秀保多入とたけぬまば
小童私保とづると若らるよおどろき主人
呼て尋ねたまふよまを答へていっふもけ小童
高きよりおはすして秀保とべるえ系ハ石川
氏おてぞく居居教け小童ハお庭と中
あつろとに教保出し出保せしつふよ佐保
川市前いふくおどろき小児と例へて
子などよへ自教保出とべきが保たまんやと

あまば小童うら然づきいりする
たまへ保付らんとつふよまうらつふとして
保の山とつふ教よて保たまへとつうられ
あまば小童うら然づきいりする
たまへ保付らんとつふよまうらつふとして
保の山とつふ教よて保たまへとつうられ

能細通と高たお保出し経冊よ保め若出せば佐
保川市前ハつふもまうら盤井路里里も
志バ一何も出さうけり佐保川市前
何年け小童教大井川と備したまへとまに

糸母よあふ糸日坂より小坂中山道とて野のうらとて
秋とよませたま入るもほほ小はめて大井川まで
とと川端まで今一首あまの秋と承たまくと宮
思ひもやと余波のねほ川流は流れて神流ととい
わくよとて出るもいづのく右坂までと引出の
わくよとて出るもいづのく右坂までと引出の

佐老曰け小童のう後に出るもあらねど遠
品伊達方村石川氏の息為五葉より
秋承てけ西首ハ美と五葉の時やごとく

此方の山ふ登りて海出せる秋より美事
形り虚淡に実成受るも一具とやごとく
き山方坂佐保川山麓となし書系伝へ
け後あまりの短うりとはぬり為花の菴ハ
を川日坂の間草かづり花葉拂成ひさく
家より好士のやまをきて其高仙成系しと
そまより島田守の谷とてくあまの事と再
たびいひさしたまひ安坂川成りらとてと味
より海士の貝名さま富士の根成雲いたる際と

うでたやうい。其日ハ三時小やどろ。山中より箱根まで
 おのゝかり路にひろいたす人ハ性未人く三女ハ
 容よ小五どまり目尻髪一々。目尻平塚より藤
 尾市ハ途中ハ盤井に客事とめし。擲のよ小孫
 たちゆえ。生まきてハ後日のおまよげと。全次のおれ
 進ふよやどりて。盤井に何人よけ。節ハ佐保川に
 茶店とも。伊勢系えしと。敏あらずと。守てお
 寄して。切なき事ありしと。ふと。び小田系へあり
 佐保川に茶店のかえり。飯守合すよ。りふさんか。り

たやう日おろし。ハ回数。助。僕ども。箱根まで
 い。いよ。ゆると。おま。大いよ。よろこ。ひ。け。め
 と。夫。あ。ん。べ。う。う。ず。を。は。へ。は。り。な。べ。事。む。つ。う。と。
 韋。路。天。の。ま。く。箱。根。へ。ま。く。り。伊。豆。相。換。の。ま。ご。ん。
 若。づ。平。と。り。ふ。よ。ま。女。成。君。び。侍。も。ま。り。ず。佐。保。川
 四。郎。目。行。坂。志。を。し。今。や。く。と。侍。か。く。ら。ん。ま。い。
 小。佐。保。川。河。原。次。よ。い。路。里。の。その。後。ハ。富。里。よ。て。盤
 井。ハ。え。え。ず。と。ハ。石。思。候。と。娘。共。の。中。女。ん。と。侍。て



先瓶盤井
今、藤四郎と
藤



四季物語

卷二

五

見るといふども、盤井いそひは似たる葵ひげん形もあらざとぞ。
 流ながよやままとと去さ小こても彼かのは一ひと羽はふふあらざるさるの
 よもあらどと、向むかふ人ひと成なりてとゞ盤井いそひハ佐保川さくわがの
 鏡かがみ裳もろ衣いの中なかよりとゞまたまふ成なりしるに返かへりてん
 用もちづづいいく通とほ成なりああききいいく一ひと人ひとの僕わく成なりはままきたきた
 たりたりるる是こゝ正ただしく置おけににたる盤井いそひふふままじじくくも
 ああららぬぬははいいくくととままああつつてていいううにに盤井いそひ日ひかか差さ中ちゆうに
 一いっ大事だいじ成なりありあり一いっ我われもも下した子こ車ぐるまの橋はしハ砂すなてあり。
 四よ花はな菱あやの綺きの刀やいば小こああじじるる上かみハ維い保ぼの下した一いったる

めぬをハはいいかかががももよよあるるべべ一いったたあるる時ときハハ番ばん事こと成なり
 知したるる女をんな主ぬしかかととてていい後ご日ひののああざざとと金かね戻もどへへままここへ
 付つけけりりししよよはは後ご伊い留せへへ行ゆくくとと昔むかしよりよりははいいふふよよ
 待まちててあるるぞぞ見み返かへせせよよとと引ひ接きてて切きててああままじじくく盤井いそひ
 井い大おほいいちちどどろろききなるる程ほどそののおお婚ゆづりもも差さ中ちゆうよよ
 執とりりままののこころろととううららくくどどももいいつつてて一いっ大だい子こをを代たいてい人ひとのの
 何なん国こくまででももとと追おひひくく後ごよりより大おほいいままははおおけけよよ折おりり
 せせいいああとと身みびび一いっははいいくく即すなはちちはは自みづかららははいい後ご小こるる

一人の僕ハ作天して近矢りまばるる藤田島ハ
 折々してさてしうしうなきま成て大骨成
 折々るそらうまぐに於へ登る林裏のやうこと
 個ダハんと上方さして急げり近去し僕ハ根
 小かけ奉り佐保川内前よ盤井が横死の横子と
 告るまば皆く作天して是が平に立戻盤井
 が死骸成てあまは今と容成たりとらうとら
 不思議するうぬ池の氷れど忽ち消失て伊
 豆と相換の傍ふねとと小とゆわと切放して

うりけまば佐保川内前とはは再なび愕然と
 かどろきいうぬる候とつるみ成まらぬを誰一人
 何成出とりのとあらず時よ一人の姫様もは
 ねしく其四うらるひまわり口をうてまらるの只今
 まぐ出伏せし盤井成入るとおぼしうをわ我
 ハ刻ち破辺の山奥よ年強る女狐よとらる盤井
 ぬしの争の妙音かくとふけまばおホごとき
 畜生まぐも其曲と慕ひ竹竿鴉鴉石の石面小
 け妙曲を尚委んと狐仲間をわいせ佐保川内前を

破迎又付ひ那の通石面よ妙き候にぬれまは
 長く三曲の程事、破迎も面び一又盤井至
 高年程余の運ふて近き方るも余故たまは
 寂く争曲の所とあふきたまは行年成難と故人
 佐保川は家の内江小抗件名居並ては曲故たまは
 盤井ぬ一小化して佐中び小もへ来まじも実の赤
 己國の西と抗の支配ちうひて実ら赤一仕事計
 八はげ亦とて出るま中一人とありふら平塚も番
 己事後よ登事候傳ら一と平塚とげ亦は坊文

房ら田へ盤井ぬ一小代正し赤藤記事、のりよ
 又と一とととせは後程余の運とらて集らま
 た己盤井ぬ一抗の敵と孫ら一人と何路路
 とうと方へのほきたまへかからせ一禁に又
 べうま本屋城達一たまで再安金以候
 たまへ一何路路も是れとの敵よ坊文
 かへとくも有難中いともたつてとてと
 かもとては坊文も亦にたまはと新ら一人
 坊文の坊文とてとてとてと佐保川も坊文

盤井の妻のあはれはたかひに嫁に嫁りて
 さまへお抱へて家のふと来たれたまへは田の
 来箱根に付たもまら小田原まで今伊方の
 やうと盤井の妻事候に眼を閉りて
 たまへに嫁に嫁りて枕の守懐に盤井の
 御もたのしきかきしきへて
 金銀の物へてはしる

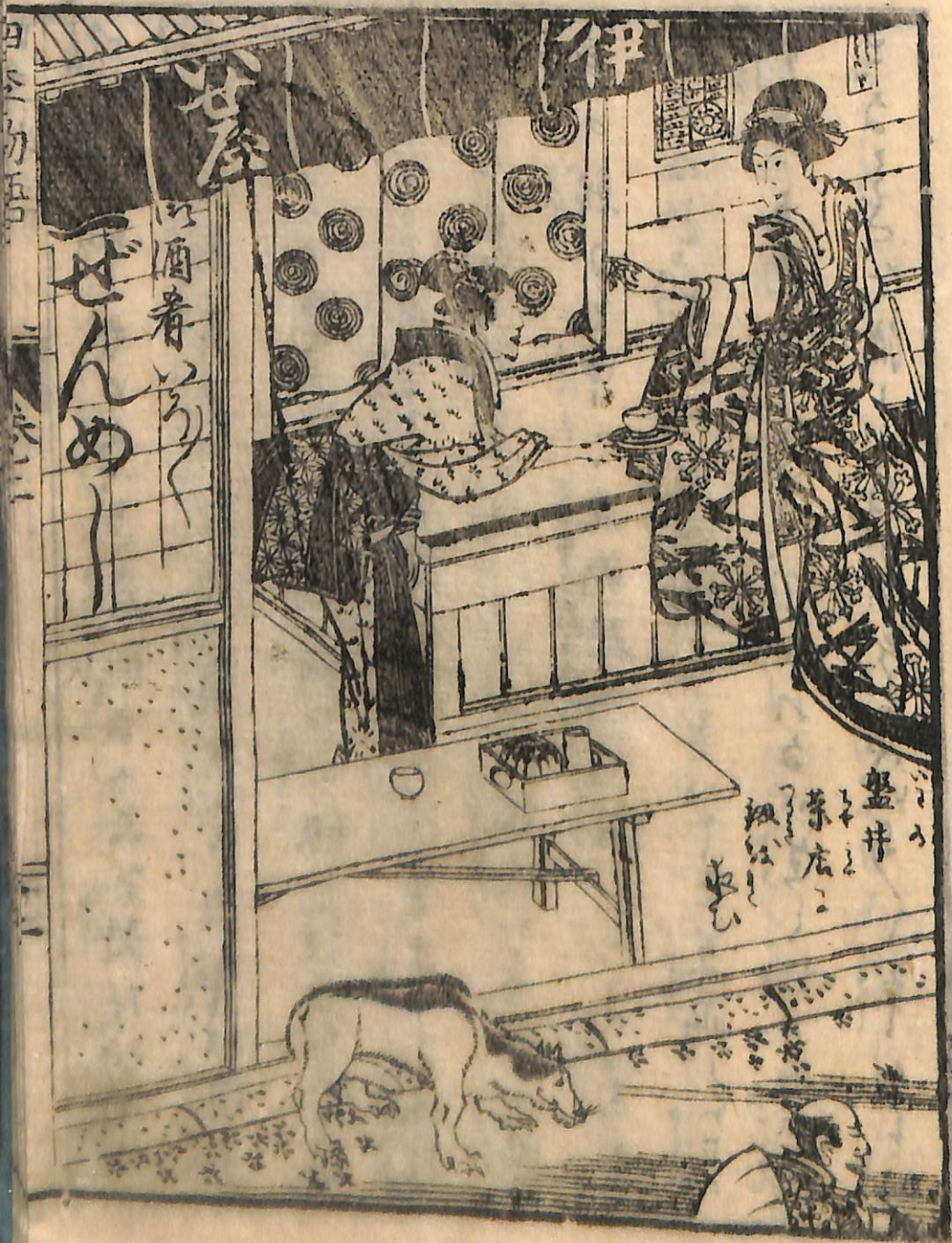
○第十四巻

盤井娘の心遣い
 嵐山七三郎判官の御殿

佐保川に系遠き處にありて盤井路
 馬里三人の金拾五兩にけり
 一の事と金の入札を事ふらむに
 利をあらはして盤井の抱の好し佐保川系に
 してまてを強くして知やう御事と
 鬼のこころ一婦人として自をこころに
 じんとふるごとく一國の御事とて山の
 ちる市へ奉る傾城とて出て盤井の
 打縁の御事とて思案して毛物

の湯衣狐個へ是成とよ引らる。保さるは買ら
 かづら。奥成屋一田舎道者の系々のとまに作ら
 妙見町まで来りし。遠くの通中への敵よ忠舎
 事もしらる。がこまに小刀一本さくといふ。ぬし。行
 とぞ名作の細もあつ。個へんとおまひひて。朝の
 茶店よ休し居らる。ゆるゆる。おへ浪人ゆきたる男
 と。町人らしき人と。竹角也一合。是もは茶店よ獨
 ぢにけ。咄し。と。盤井のまうさふけて。人よ。成
 見らま。し。と。居らる。つぶき。守居らる。よ。彼浪人声と

いそめ。先刻より。と。く。いたの。と。通ら。け。刀。の。成。人
 ぞ。お。落。い。五。郎。正。宗。と。よ。いら。折。紙。も。係。ら。る。は。後
 ま。き。入。用。ゆ。え。お。拂。を。し。竹。年。只。今。金。五。兩。情。用
 いたし。今日。中。五。兩。の。金。が。さ。り。れ。ば。叶。と。ぬ
 ち。へ。に。を。有。扱。の。折。紙。付。し。代。物。成。五。兩。と。扱
 さん。と。つ。入。る。は。成。成。推。量。あり。て。竹。年。金。子
 成。か。し。下。と。ま。よ。し。低。成。し。て。た。の。と。な。れ。ば。町。人
 亦。然。き。ま。い。は。難。矣。ら。ん。是。其。刀。成。お。見。し
 せ。し。と。よ。小。名。と。ぬ。さ。ま。と。よ。明。成。と。し。て



次毛の紐ともりのしき名能まうぶと改たむるに
 いらふよお遣あくるむらぶ籍よふさめぬ程池分
 屋又物ともんえふり。を極の上能とにりひふぶ
 持合せし金子。三兩さらでつあしす。是もは松
 ささきりら。佃中ぐーとの入よ浪人の大ひよ迷
 熱の舳も中五兩拾兩よ放とばま室よ
 あくねど。急小入用の候あまきバくも。五兩とる
 何年五兩よはるのへ下とれまぶ生む世の心懸
 と。なるごとと流しねぐひりまぶひりくきくも向

志うぐ入用よ是ま。かへぬえせあるべしと
 あへねば浪へ。免方よらま。足下とりのるる
 よて。けふとこま。うら返替ありていひう人ともこ
 事ま。け金ぬけてい生ても死でもうと。是れと
 極めし。而りらま。ま出る小町人のえひきもせて
 引ふまのつうま。は浪人極殺りふか。うび。死と
 きいめし。やうとまま。は。盤井するに。あひす。ま
 名細の日し。ま折るま。浪人と。名とら。ま。あ。り。余
 へま。ぐ。う。け。る。り。り。五兩あ。う。と。る。時。は。命。ふ。も

代に五藝一徳あるは、お披露儀、お披露儀
 中、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 本、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 命、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 小、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 の、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 金、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 五、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 兩、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 の、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 五、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 兩、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 の、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀

個、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 の、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 五、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 兩、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 の、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 五、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 兩、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 の、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀
 儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀、お披露儀

人々成押のけ。川端の茶店の床に。揺りかけ
たるさまとねく。驚き。盤井にまどくもやうだ。
一人舞ふり立て。実をいらぬ世話といたす入か
け方の盤城由へ引らうて山田の縣令へ召違ふと。
まこと交りるねふたびはさのけ系挨拶しり
きてハ鉄ともいふに繩かけんとハお徳らぬ中ハ指
もころせぬとさつさう。夏はバとさくハそれか程
あつて。おまへへおあ盤城へて。お救多とりし中に
けり五十兩の形。お置しとも置とさうま今期

よりけおは納まし。おけ女其刀と横たへ通るを
おへ。盤城とPが。後りふさうらふやと。息すこと各
ける。園五ふたび。盤井小向ひ。先別相の山とけ
合し。其紐いあらざりしに。いっさうさうしてけおへ
お系ありしや。おお徳。おまとは尋ねるに。盤井ハ洞
とぬぐひ。いっさうまおお相の山と。おんをさう
せし。お方さう。いっさうお挨拶をさう。雅育とよ。
おおまより。お見所とやらん。お体と居いところへ
浪人らしき男と商人とま。けり刀五兩の洞

山嵐 七郎 盤井の 老郎 故



云々いんいんの事ことと金かね投な出でるる事こと一いっつつもも

 一いっつつももはは人ひとのこころ盛さかるる事ことによりて一いっつつもも

 善よきなることをしては國くにの様子さまをまままとしては口くち五ご十じゅう兩りょうの妻

 一いっつつもも金かねをまままとしては井い田でんの事としては一いっつつもも

 一いっつつもも盛さかるる事こととしては一いっつつもも

 一いっつつもも助たすける事こととしては一いっつつもも

 一いっつつもも一いっつつもも

 一いっつつもも一いっつつもも

 一いっつつもも一いっつつもも

士しの望望ぼうの在在ざいとしては老らうの時時じとしては

 一いっつつもも一いっつつもも

 一いっつつもも一いっつつもも

 一いっつつもも一いっつつもも

 一いっつつもも一いっつつもも

 一いっつつもも一いっつつもも

 一いっつつもも一いっつつもも

 一いっつつもも一いっつつもも

父源をまがを切殺し立退し曲もの
 自ハ桐刃金次百縁長老よま仕せし父が
 ちんごを中といく。行年仇仇後さんとんを
 一おけな奥方系家の供にまうし一お瓶のみに
 此供よとらまし一仇幸ひに父の仇仇祓らんと
 於よある母妹仇尋共く山早らん去まがし。世に
 小て一り一敵よ出合らるとも。行とぬて本を仇返ん
 母あわしやと。おもいば口をきし一仇せめて。係られし
 仇かく愛目おあひも。刀の仇女のつらごらふとこそ

不意したまはんともよけむ一大事なめしゆると
 影もなく影らるまは嵐山子仇打て共武源をま
 とらしハ菅原家と親れたる聖旦を母なまは知が
 の時付内へ立紙さき。而合せしゆありお其娘女
 ちんごや共うしおあならぬ婦人かちあつて親の敵
 仇付せ系らせん。仇易くれと迷らまは。盤井のゆ
 力伝。あしぬせと。大金取もて。刀仇自にあま
 たまひ入る又助太刀して。後いらんと。内事身に余り
 娘しなごら。逆の事おまめとあつて。たまはらんや。逆ハ

男の敵なきがらよし〜カとおりの侍らんぬまふま
男のまわりの不道人ふて信徳の平次をかくして
まゝ持てくるこり〜るゝ奥方のあらざるげねがひ
此中をくゞられよと眼尻よまぬ合ませ述べよとせ
三郎も思ふまゝならずをの〜我とても未だるまわ
あらねども嫌なく通じらるゝまゝと〜男のせざる〜後
いゝなる人ふても嫌なたの〜其上とて悪せんままでの
平次と〜況は揃付〜。別井の行くは後〜これだ
盤井も以てなる藤田島が返〜たる目貫と〜は

男の初め〜と〜ま号のま舞縁の平と〜及中〜と
せ〜あるまゝの紀念に〜をたてたびにま〜と〜に後し
ま〜り〜一緒に〜へ〜登り〜母妹も〜對面して〜おわれと
勤ま〜び〜七と〜布匹と〜ふり〜。糸は〜ふよて〜十日の角力な
賣切たま〜。容易ふの扱〜と〜し〜。後〜り〜級へのぼる〜し
此方い〜え〜へ〜ぬ〜り〜敵の〜手筋〜が〜出〜したま〜へ〜と〜どけ
ねく〜被〜ひ〜ふ〜り〜取〜せば〜流石〜よ〜と〜ま〜と〜も〜得〜も〜い〜と〜ん〜互〜に
名跡い〜れ〜し〜れ〜と〜は〜を〜ま〜く〜ぬ〜ら〜た〜ま〜へ〜と〜引〜と〜これ
ん〜と〜ふ〜り〜〜上〜方〜さ〜し〜て〜ぬ〜り〜ら〜る〜ま〜ま〜盛〜に〜往〜ま〜ふ

人もあつたまじりてお子の苗受さらし五六人をうつくし
 多集おひ首尾いとひそく声なき浪人と見えし
 男あつた見えし海も出来しつらつらにむすふと
 ひそめ女が母あはしやとつとをすけ。魚と一被刀取
 安ら賣付再び仲間を退人と見え。五十兩持刀の
 かつら。右市へ賣れ。嵐山七と舟のつらつと出
 あつたら魚の漁しとれども五十兩といふけるし
 既今魚のたまたまへとつらつた清うぬら。商人商買
 志なぐら。まゝと奉り。とかり入かやあめ。女とコリヤ

とつとと耳はそんならとよくの

おあて とい 初め 千ヨシ



